# 中国における西アフリカ系商人のコミュニティ形成とビジネスの実態
## ――広州に生きるアフリカ出身者とチョコレートタウンに焦点を当てる――

ウスビ・サコ

### 1. 背景と目的

チョコレートタウンとも呼ばれている，中国南部に位置する広州（広東省の省都）の各地にアフリカ出身者居住地が年々増加している。はっきりとした統計的なデータはないが，広州のアフリカ出身者の流動人口は 40 万人以上，長期滞在者は 15 万人以上，そのうち定住者は 7000 人以上とも推定されている。

本報告では，広州のチョコレートタウンを形成し始めたとも言われているマリ人，ギニア人などの西アフリカ出身者への調査と取材を通して，その形成過程，定住に至るまでのプロセスなどを明らかにしたい。また，広州に見られるアフリカ出身者の様々なコミュニティを分類し，それぞれのコミュニティの実態と課題を整理する。さらに，アフリカ出身者のビジネスの内容などにも言及し，制度の問題や，ビジネス環境の課題をまとめる。中国における新しい市場（拠点）開拓とコミュニティ形成を継続しているアフリカ出身者のビジネス展開と課題を整理し，中国とアフリカの新たなビジネスの展開と可能性を考察する。

### 2. 方法と流れ

中国のアフリカ出身者（以下便利上アフリカ人という）コミュニティに関心を持ったのは，日本に移り住んでからである。中国に滞在した当時，留学生，研究生や研修生などがメインなアフリカ人居住者だったが，ビジネスで中国に居住していた者は非常に少なく，居たとしても，留学終了後に少し残ったものばかりだった。中国のアフリカ人留学生のコミュニティは多様ではあるが，私が留学した当時，主に二つの活動が中心に行われた。一つ目はアフリカの認知度を高めると同時にアフリカに対するイメージ，認識を改善するとともに，中国や中国人がアフリカに対する誤解を解けること。二つ目は，アフリカ人同士の円滑なコミュニケーションとお互いの国の文化を学び合い，相互扶助をすること。その他，中国社会と問題などが発生した場合，組織した委員会が代表として，仲介，弁明などの活動も行った。その当時，多くのアフリカ人はどこかの大学に所属し，大学を中心に活動が行われていたのである。

その後，次第にアフリカ人の移住者が増え，各国外交官と意見交換をした時，特に広州では，

アフリカ人たちと中国人の間に新しいビジネスが展開されると同時に，様々な問題も見られてきているとの報告を受けた。そこで，2006年に，広州でマリ人協会ができたとの情報を受け，その実態調査を行った。具体的には，委員会の構成メンバーへの聞き取り，居住環境，仕事環境の視察，その他のアフリカ人の生活環境の視察を行った。それに基づいて，正規に中国でビジネスを行っているアフリカ人のインタビューとビジネス環境（南京と広州）などを2008年に視察し，関係する中国人のインタビューも行った。2011年に上海と南京を訪問した。2012年に，上海，南京，広州，義烏の調査を行った。2016年に広州のみの調査を行い，特に，生活面，コミュニティの衰退と中国人のビジネスでの参画を調査した。また，2013年に北京を訪問し，北京を拠点に新しいビジネスを設立しようとするアフリカ人のインタビューを行った。

以上のように，段階的かつ広範にアフリカ人の中国での移住とビジネス設立を調査してきたが，本報告では，主に広州とそれに関連する地域の調査内容のみの結果を報告する。

表1　調査対象と実施時期

| 調査年 | 対象地域 | 調査内容 |
|---|---|---|
| 2006 | 広州・北京 | アフリカ人コミュニティの実態・聞き取り |
| 2008 | 南京・広州 | アフリカ人商人の個別聞き取り調査 |
| 2011 | 上海・南京 | アフリカ人商人の個別聞き取り調査 |
| 2012 | 上海・南京・広州・義烏 | アフリカ人商人の個別聞き取り調査 |
| 2013 | 北京 | アフリカ人商人の個別聞き取り調査 |
| 2016 | 広州 | アフリカ人商人の個別聞き取り調査 |

## 3. 広州アフリカ人コミュニティの形成と実態

### 3.1 中国の経済政策の変化とアジアから中国への移入促進

中国とアフリカ関係は1950年代に始まり，特に，1955年にインドネシアのバンドン会議で開催された初のアジア・アフリカ会議（通称バンドン会議）を機に，中国はアフリカ諸国に急接近し，イデオロギーを中心とした外交関係を結んだ。当時の中国としては，アフリカの国々と共に発展していく発展途上国として友好協力関係を築くことが主な外交活動の目的だった。また中国は，バンドン会議以降に形成された第3世界（アジア，アフリカ，ラテンアメリカなどの発展途上国の総称）の国々の中心的役割を担ってきた。1960年代，独立ラッシュに入ったアフリカ諸国は，中国の支援を得て宗主国への対抗路線を歩み，多くの国は社会主義・共産主義を選択した。1960年代半ばに，中国は文化大革命政策（1966年5月～1976年10月）を始め，世界主要諸国より非難され，一時的に世界から孤立した存在になった。その1960年代初期に，当時の首相であった周恩来はアフリカ訪問を決心し，イデオロギー外交に加え，援助外交の姿勢をみせた。その恩恵を受けたアフリカの国々は，アフリカのみならず，世界における中国のイメージ改善に一役買った。これらの多くの国は非同盟政策をとり，西側の国とも東側の国とも交流が認められていた。

1960年代の決して裕福ではなかった中国からアフリカ諸国への主な援助は，中小型工業プロジェクト，農場の開拓，井戸掘りと食糧援助である。これらに加えて，水道，電気，エネルギー

の開発なども行った。また，医療協力隊の派遣，スポーツ文化施設などの建設も援助した。

1970 年代まで，中国は，米国とソ連とは無縁または関係の薄い国と地域に潜入する政策を取った。1955 年から 1977 年まで，中国の半数近くの大学を留学生受け入れに開放し，2000 年代まで，約 15000 名のアフリカ出身の学生を受け入れた。中国は，文化大革命の期間中であるにも関わらず，アフリカへの援助をさらに強化した。

中国のアフリカに対する援助は，当初は政治的イデオロギーを重視したものであったが，1970 年代末の改革開放政策，1990 年代の冷戦終結を経て 1990 年代後半以降，中国がグローバル経済に参加するようになると，援助も経済協力重視へと大きく転換した。

中国対アフリカ関係の第二段階は中国の改革開放政策が始まった 1978 年からであるとされている。中国の政策が経済活動重視に移行したことにともない，対外援助についても調整が行われた。1982 年末に中国の首脳は中国と発展途上国が経済技術協力を行うための四つの原則（平等互恵のもと，実効をむねとし，多様な形式で，ともに発展する）を打ち出した。

中国・アフリカ関係の多くの研究は 2000 年代を対象としている。この時期に，中国・アフリカ協力フォーラム（Forum on China–Africa Cooperation, FOCAC）が設置され，以降 3 年ごとに開催されている。2003 年にアディスアベバ（エチオピア），2006 年に北京，2009 年にシャルム・エル・シェイク（エジプト），2012 年に北京，2015 年にヨハネスブルグ（南アフリカ）で開催された。2000 年に開催された第 1 回中国・アフリカ協力フォーラムでは，中国とアフリカの経済協力関係を強化し，アフリカの重債務の軽減と自立開発のためにアフリカ諸国の専門家を育成するための基金が設置された。さらに，中国はアフリカへの 14 億ドルの債務免除を発表した。

2006 年 1 月に中国政府は対アフリカ政策に関する文書を発表し，「政治的には平等と相互信頼，経済的には互恵とウィン / ウィン，文化的には交流と相互に参考としあうこと」という政策を打ち出し，中国の対アフリカ援助はいっそう広範な分野に及ぶこととなった。

中国のアフリカに対する援助政策と実践は中国の新しい対外援助政策の形成に非常に重要な役割を果たした。実際，アフリカは多くの状況下で中国の発展途上国に対する政策の「テストケース」「モデル」地域となった。

中国のアフリカ政策に関する白書が 2006 年に初めて発表された。当時のキーワードはウィン・ウィン関係の提唱である。中国がアフリカへの援助と協力関係を保証する，約束するものともなった。2006 年の中国･アフリカ協力フォーラムでは，40 カ国以上の首脳に，経済界のリーダーが参集し，中国の地方都市にも交流と経済協力関係を広げた。さらに中国が，2009 年までにアフリカへの援助を倍増した。中国アフリカ開発基金を設立し，貿易発展のための投資を行う約束をした。この時期，中国からの投資を促進するため，アフリカ諸国で特別経済区の開発や，関税の見直しが検討された。これに対して中国は，アフリカ諸国からの輸入品にかかる関税の免除を決めた。

中国のアフリカへの投資と産業開発は，アフリカのマーケットとしての可能性を他の国にも気づかせた。その過程で中国の「帝国主義的」な行動が批判され，また契約条件や仕事の取り方についても批判が集中された。特に建設会社の汚職問題が深刻であったと言われた。

### 3.2 中国アフリカ関係の背景と人口流入

中国とアフリカ諸国は長年，イデオロギーを介して，相互扶助関係を維持してきたが，中国政府の1978年に決定した経済体制の改革と対外開放政策，いわゆる改革開放政策決定以来，1980年代から中国企業と商人のアフリカ進出が急激に増加した。それに伴い，アジアでは，香港，ジャカルタやバンコクなどを拠点にしていたアフリカ人ビジネスマンたちは1990年初頭から中国広州に移住し始めたとされている。様々な証言によって，広州で定住型のビジネスをはじめたのはマリ人とギニア人であると言われている。まず，1990年からムスリムのアフリカ系商人が広州の周辺に拠点を設け始めたのがはじまりだとされている。

もう一方，中国に増加するアフリカ人居住者をビジネスチャンスと捉えた中国の各種マイノリティ（少数民族，ムスリムなど）も広州に集中的に流入し始めた。中国人もアフリカ人居住者も，主なビジネスはアフリカからやってくる商人への商品提供と買い物のサポートである。この短期滞在する商人たちは，中国でも本国と同じ食事，宗教行事，日常生活を求め，それに対応するため，多くのアフリカ料理店，美容室，教会，モスク，シャーマンなどが増えてきたと考えられる。短期滞在者にとって，生活環境の充実は見られるが，長期滞在者にとっては，子どもの教育を始め，正規ビジネスの充実，中国の法律とシステムの複雑さが依然と問題として残っている。

年間30%から40%の増加率で，アフリカ人居住者が次第に増え，流通する商品のビジネスのみならず，生活基盤形成とそれを支えるサービス産業に従事する居住者も著しく増加した。このコミュニティ形成に必要な場づくりが着実に進む中，中国が持つ各種制度づくりが追いつかず，中国人社会との衝突も少なくなかった。2000年初頭に調査をしたとき，広州市政府が国ごとの住民組織づくり，宗教集団の拠点づくりに懸念を示し，それらの拠点解体行為も行われたと見られる。

また，2008年の北京オリンピック，2010年の上海万博の開催に備え，中国政府は外国人に対するビザなどの滞在条件を厳しくした。それを機に，アフリカ人居住者の減少が始まり，今もなお減り続けている。近年，中国でのビジネスを夢見て，広州に移住したアフリカ人が中国人と結婚して，家族を形成しているケースも多く見られるが，これからも中国におけるアフリカ人コミュニティは新たな拠点を開拓し，成熟していくと思われる。

### 3.3 チョコレートタウンの形成過程

中国政府は，改革開放政策を打ち出し，1978年から1992年の間，市場経済へと移行した。また，1992年に社会主義市場経済の到来に伴い，中国の中小企業の生産量が増加するとともにそれらを消費する市場の開拓が必要となった。コスト面も含めて考えると，国内市場だけではなく，国外の巨大市場を開拓する必要があった。その1つにアフリカ特にサハラ砂漠以南のアフリカ諸国が選ばれた。また，同じタイミングでアフリカ人の広州への移住が始まり，またその中で新しい職種が始まったと考えられる。

チュコレートタウンと呼ばれているアフリカ人の集中するエリアは，主に越秀区，天秀ビルを取り巻く小北路・登峰街・環市中路などの地区，淘金・小北・広州駅の周辺に集中している。この地域では，自然発生的にアフリカ人集住地区となった。主にビルを中心に，そのアパート

がビジネスの拠点になっているケースが多い。初期の頃，言語，宗教などに関係なく，多様な人種，民族，ビジネスが同じ建物に集中していたが，人口が増えるにつれ，建物が専門的になり，のちに民族，宗教などによってコミュニティが分割し，チョコレートタウンと呼ばれているまちも一箇所に集中しているものではなく，点在しているものとなった。

広州におけるアフリカ人コミュニティは三つに分類することができる。「エスニック集団」「言語集団」「宗教集団」である。この三つのどれとも属しない者もいるが，その多くには旅行者か半定住型である。

### 3.4 まとめと考察

中国対アフリカ政策を援助や技術協力という視点で解説してきた。中国の政権の変化や出来事によって，対アフリカ政策の位置づけとあり方が変わってきたことがわかった。毛沢東の時代には中国援助は主に3つの目的をもっていたと考えられる。まず，中国は独立直後の新生アフリカ諸国が自立できるよう，農業開発援助を行い，産業開発の力を持たせることである。これらの援助は主に，農業開発，技術支援と短期プロジェクトが多かった。これらのプロジェクトに必要な資金は中国が無利子で提供することを貧困国間の相互扶助と考えた。二つ目は，非同盟国関係と第3世界主義の展開によって共産主義・社会主義というイデオロギーを開発途上国に推奨することである。最後に，中国の援助政策を利用して，台湾とアフリカ諸国との関係を阻止することである。アフリカの国々と友好関係を結ぶことによって，中国の国際認知度が高くなり，国際社会のなかで中国の役割と位置づけを明確にしていくことを目指していた。様々な学者がこの時期の中国へのアフリカ援助を大きく二つに分類している。一つは中国の存在意義と必要性を確保するための活動で，もう一つはロシアや台湾を排除するための活動である。対アフリカ援助は，文化大革命直後に最高額に達した。中国のイメージ改善のため，アフリカに焦点を当てて，援助と技術協力を積極的に行うことで，アフリカへの接近を図り，国際社会における地位を獲得したと言える。

1980年代の中国援助は方向性を転換し，援助する側と援助を受ける側の双方にとって効果的な関係に展開した。言い換えれば，一方的な援助から，双方向の貿易に路線を変更した。これによって中国は，アフリカから持続的な資源供給を受けると同時に，アフリカという新しいマーケットの可能性も探ることができる。これらの背景には，1976年の毛沢東の死後1978年に，鄧小平が「改革開放」政策を推進して社会主義経済の下に市場経済の導入を図るなど，いわゆる「社会主義近代化建設への移行」が始まったことがある。そこから中国は一方的な援助のボリュームを小さくし，中国が利益を見込めるプロジェクトを中心に開発援助を展開した。1982年，趙紫陽首相がアフリカはポテンシャルのあるマーケットで，エネルギー資源と原料を提供できる可能性が高いとの考え方を発表した。

1995年以降の江沢民の政策は，アフリカマーケットを中国製品の国際市場参入前の実験場として利用することであった。また，同時期に，西洋諸国のアフリカ援助が民主主義の導入という条件で減り始め，中国にとって絶好のチャンスであると考えられる。

## 4. 広州におけるアフリカ人のビジネスの実態と内容

### 4.1 広州におけるアフリカ人のビジネスの流れと構造

チョコレートタウンのビジネスの流れは極めてシンプルである。流通する商品の確認と買い付け，買い付けのための送金システム，支払いシステム，出荷などの作業である。ビジネスの言語は電卓と中国の各種 SNS（WeChart/WeiBo）と WhatsApp/Viber である。流れとして，買い付けする人が広州を訪問し，中国に定住または半定住している仲介人が各種ショップと工場を案内しながら，時代の流行のもの，他の客が購入しアフリカで人気になっている商品も薦める。その場で出身国と中国の間の商品の確認，提案された新商品の可能性を SNS で確認して，購入する商品と量を仲介人と確定する。支払いについて，基本的には現金ではなく中国の電子マネーにて支払う。当然，買い付けに来ている客はそれを持っていないため，多くの場合，仲介人が支払う。その仲介人は店や工場からマージンを取り，客からもサービス料をとることになる。商品は買い付けた店や工場から直接仲介人が登録あるいはメンバーとなっている倉庫（カーゴ）に配達される。そこで，一人の客が1つのコンテナ分の量を購入できないとき，同じ国向けの客と合同出荷する場合がある。支払う送料は各自の荷物の立米数で決める。余った空間があれば，仲介人が推薦する新商品で埋めることになる。

広州のビジネスを可能にする仲介人を Gordon MATHEWS 氏によると，物流代理人（Logistics Agents），仲買人（Middlemen）は基本的には文化ブローカー（Cultural Brokers）に分類することができる。ここで文化ブローカーとは，ある文化の事象と文脈を別の文化的背景を持つものに伝達できる人のことをいう。この概念は古くから存在しており，文化的な摩擦や衝突を減少する役割も果たしてきたという。Gordon MATHEWS 氏によると，グローバリゼーションの時代に，文化ブローカーの役割はかつてにないほど重要になってきた。かつて，世界中の社会間の旅は長いプロセスだったが，今日，アフリカの商人たち（traders）は，ラゴスまたはナイロビで飛行機に乗り，旅先である中国社会に全く知識を持たないまま 24 時間以内に到着することができる。

そういう意味で，文化ブローカーは商人出身の文化的背景かそれに近いものを持つものが必要であると考えられ，現段階では中国人が文化ブローカーになることは難しい。

一方の物流代理人とは，長期滞在ビザを取得しているアフリカ人に多い。彼らは，中国人との婚姻，投資などで，法的根拠に基づいて中国に長期滞在をすることができる。多くは，中国・アフリカ貿易の物流代理店やファシリテーターとして，社会的，文化的資本を使用している（Le Bail 2009: 14-17）。彼らの仕事は，中国からアフリカの様々な空港や港に航空またはコンテナ船で顧客の商品を送ることである。彼らは一般的にアフリカの物流を直接的に扱うのではなく，アフリカの港湾に物資を持ち込むだけである。広州にはおそらく 200 人のアフリカの物流代理店があり，いくつかは著名なオフィスと看板があり，その他はオフィスビルの高層階に隠されている。ほとんどの場合，中国の物流会社は，世界中の大量のコンテナを予約しているため，アフリカの物流代理店よりも安い料金を得ることができる。また，中国の物流会社は，合法的または違法的に，中国の習慣を超えて商品を取得する専門知識を提供することができる。アフリカの物流代理店の仕事は，商品の検査，顧客の品質を保証すること，また，顧客の継続的な

ケアを決定的に行なうことである。広州のトレーダーの約 30％は女性であるが，物流代理人は圧倒的に男性が多い。

仲買人は確かに必ずしもそうであるとは限らないが，個人的および文化的な見知らぬ人を信頼することの困難さを示している。トレーダー自身の文化的背景を持つ仲買人は，このビジネスを可能にする重要な役割を果たす。すべての物流代理店が仲買人であるのに，すべての仲介人が物流代理店ではない。実際，中国での経験を持つ大半のアフリカの貿易業者は，仲買人になることを夢見ており，母国からの知人が広州に来ると，この夢を時々外にもらすことがある。しかし，物流代理人は，顧客との信頼関係を築き，しばしば仲介者としての収入のかなりの部分を獲得することができるため，この役割を果たすのに特に有利な立場にあると Gordon が述べている。

### 4.2 個別事例に見るコミュニティ生活の課題

ここでは，中国で生活しているトレーダー，仲買人などへの聞き取り調査の一部を示す。

#### （1）女性 AD さんの中国でのビジネス

AD 氏はマリの首都バマコの女性で，1982 年に生まれた。マリでは，高校まで勉強し，中退して小売のビジネスを始めた。現在，学生兼仲買人をしている。

AD 氏は中国に来た経緯を次のように語っている。「妹が 2002 年に結婚して，未婚の自分に親が勧められた男性との結婚を拒否した。2006 年，中国に行く決心をして，実施した。その後，中国で出会った同業者と結婚したが，2013 年に離婚した。二人の間に，娘一人はいるが，子育てと仕事の両立が難しいため，マリに残してきた。」

AD 氏は中国に来る前，アフリカでも貿易を行っていた。具体的には，マリからガーナ，ギニア，セネガルなどの間で商売をしていた。

中国に移住した当初，広州アフリカ人社会では，女性仲買人の評判が悪く，仕事がしにくかったという。そこで出会った男性と結婚した（2007 年）。翌年，中国のビザ問題が深刻になり，タイやマレーシアに一時的に移住した。2009 年から居住したバンコクで長女が生まれたが，夫が犯罪に巻き込まれたため家族全員が強制送還された（2011 年）。夫の帰国後，家族でしばらくマリに住んでいたが，中国に来るビザがおりたため，一人で中国に戻ってトレーダーの仕事に従事した。周りのプレッシャー，夫の過剰管理のため，2013 年に離婚した。

仕事は無事に続けられたが，年々中国のビザの条件が難しくなり，中国語の学校（学費 8600 元，保険 600 元）に通うことにした。それでも，半年（または 3 ヶ月）ごとのビザしか許可されず，また条件が厳しいため，楽に仕事ができないのが現状である。

仕事の内容として，お客さんから来た注文の買いつけを行い，複数の人でまとめてコンテナを発送する。中国を訪問するお客さんならアテンドをして買い物をサポートする。一人で行動するが，複数で荷物を送るため，そのコーディネートをすることもある。

中国での女性の生活の実態は次のように説明をしている（女性の共同生活）。国ごとの女性たちはグループを作って，結婚式，出生式，マリならイスラム教の祭りを一緒に祝っている。ただ，中国に住んでいるアフリカの女性には3パターンがある。自分で仕事をして生計を立てている人，

主婦でいわゆる家庭管理のため，連れてこられた人，結婚して共働きしている人に分かれる。家庭管理のために来ている女性は平均的に識字率が低く，家に閉じこもっていることが多い。女性のグループだけではなく，マリ出身者グループの経理も担当している。

中国に住んでいるアフリカ出身の女性は国によって仕事の傾向が異なっている。主な職業は飲食店経営，美容室経営，雑貨などのショップ経営と一部はトレーダーを行っている。

中国に対する期待，チャイニーズ・ドリームの実現する可能性が薄くなっている。多くの人が韓国に移住し始めている。韓国は居住環境も学校も探しやすく，現地の人たちと良い共存関係ができていると言われている。中国はアフリカ人を残したくないと感じられる。アパートのレンタル時に書いた名前の人が部屋にいないだけで，警察に連れて行かれる。女性一人身でも深夜にノックされ，身分証の確認はされる。ドアを開けなければ，強制的に部屋に入って，隅々まで調べられる。広州から完全にアフリカ人を排除する動きが始まっている。多くの人はビジネスの拠点が移動できない場合，帰国を選択していることもある。

### (2) 今後の展開と課題

今後の中国におけるアフリカ人のビジネスのスタイルに変化が見られる。中国ビジネスマンたちのアフリカ市場開拓と流通システムの変化（中国人ビジネスマンの介入）が目立っている。中国人が仲買人を行うと，買い付け先の卸売店や工場などが安心する傾向がある。その中国人仲買人は英語，フランス語ときにアフリカの幾つかの言語をマスターすることもある。またアフリカから来た商人はときに中国人をより信頼することもあり，安心して任せることが多い。デメリットとして，商人の文化的，社会的背景を十分に理解できていないことである。そのため，提案や勧める商品にズレがあったり，言語の問題で齟齬がきたされることもある。一方で，アフリカにて直接ビジネスを展開している中国人が年々増えており，商人が中国まで買いに来なくても，中国人が提供してくれることがある。

さらに，中国政府の制度変化に対する不安（ビザの制度変化，輸入出の制度変化）で，2000年代ほど簡単に中国に来ることができなくなっている。ビジネスの内容そのものは多様化しており，技術移転，アフリカにて産業開発を行っていることもある。

アフリカ人のコミュニティの維持問題（住居，家族，子供や集会（宗教行事，伝統行事など））が顕著になっている。最近，コミュニティの安全，安心のため，市民グループ（Associations des Ressortissants）が組織され始めている。また，出身者の多い国の政府は，領事館，商務事務所などを設立し始めた。教育機関として，インターナショナルスクールも開設することも目立ち始めた。

## 5. まとめと中国のアフリカ人コミュニティの今後

コミュニティの定義において広井良典氏は，「コミュニティには人間が，それに対して何らの帰属意識をもち，かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」と指摘した。また同氏は，コミュニティが「生活コミュニティ」「空間（地域）コミュニティ」「時間（テーマ）コミュニティ」へと変化するものだとも述べた。こ

の条件に基づいて考えると，広州で形成されたアフリカ人コミュニティは，一時的で，空間的なコミュニティであることは考えられるが，現状ではその基盤となる空間（地域）的要素が確立できないまま，解体される傾向にある。他方で倉沢進氏は，コミュニティが成立するための条件として，①共同性②地域性③つながり性があげられると指摘した。広州チョコレートタウンの場合は，アフリカ人コミュニティの安定的な定住が認められず，コミュニティとして成熟できいまま解散に追い込まれたと考えられる。

中国のアフリカ人コミュニティはある程度の連帯が見られる共同体としてはじまった，解体のプロセスが進む中，外的要因（政策など）によって全体的な，広井氏が言う「一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識」が徐々に低くなり，個または分裂した小集団の解体，共同体が集合体へと変化していることがわかる。広州のアフリカ人コミュニティであるチョコレートタウンはフランスの社会学者エミール・デュルケーム（Émile Durkheim）によるアノミーにあると考えられる。つまり，「集団的価値や尺度や方向付けが失われることによる社会の無秩序化が見られる。」ことである。

広州のアフリカ人コミュニティは様々な時間（時代）差で生成され，共同体のメンバーの関係が確立される前に，外的要因によって解体する危機にさらされた。このコミュニティは前述のように，流動的で一時的なコミュニティであったことが解体の大きな原因の一つであることが考えられる。つまり，チョコレートタウンと呼ばれてきたものは，アフリカ人の様々な小集団またはサブ・コミュニティ（民族，宗教，言語）の集合体として形成されたが，小集団どうしの連携意識が高まらないままであった。広州に居住するアフリカ人の多くにとって重要なのは，中国の産業やビジネス界との商売の成立であり，成熟されたコミュニティ形成ではなかったと思われる。しかし，ビジネスを積極的に行なうため，安定的なルールやビジネス環境づくりが必要ではあるが，急激なアフリカ人増加と居住に対応する制度づくりが中国では優先され，よってビジネス支援システムが欠落し，多くのアフリカ人のビジネスはコミュニティと共に解散に追い込まれたと思われる。

2000年代から中国・アフリカ協力フォーラムが設立され，中国とアフリカ諸国の経済協力関係がより一層強化され，ビジネスも正常化される傾向になったと言われている。しかし，広州で成立された半定住型のインフォーマルセクターとも呼べるビジネスは，特定の空間的コミュニティを必要とせず，利益共有型の小集団（ネットワーク）が中心となる新しい形のビジネスとして引き続き展開されることと思われる。また，それらの小集団（ネットワーク）は地域的な制約を受けないため，中国以外のアジアの国々に転移することが考えられる。今後，アフリカ人が中心となって形成されたチョコレートタウンのような集合体は解体され，個人が中国でビジネスを展開するにあたり，中国人がカルチュラル・ブロッカーとなり，中国人と個々人とのビジネスパートナーシップに展開されるであろう。また，一部で行われている「インフォーマルセクタービジネス」は物理的な空間的制約を受けないため，サイバー空間（SNS空間）で展開される可能性もある。

## 参考引用資料・サイト

1）阿久津昌三，ウスビ・サコ「アフリカ＝中国の紐帯 ――環太平洋地域における移民コミュニティの

形成 6」（2013 年 3 月 16 日実施）立教大学 平和・コミュニティ研究機構 , No.16 2013 年 11 月 23 日発行

2）立教大学 平和・コミュニティ研究機構主催 公開講演会主催「環太平洋地域における移民コミュニティの形成 6「アフリカ＝中国の紐帯」」阿久津 昌三 氏（信州大学 教授）「中華人民共和国の対アフリカ援助外交」ウスビ・サコ氏（京都精華大学 准教授）「中国におけるアフリカ人ビジネスマンの商売環境と定着プロセス ――上海，南京，義烏，広州の実態調査を通して――」立教大学池袋キャンパス・2013 年 3 月 16 日（土）

3）ウスビ・サコ「文化大革命期における中国援助とアフリカ外交の役割」（中国文化大革命と国際社会―50 年後の省察と展望）静岡大学人文社会科学部・国際シンポジウム論文集 - アジア研究・別冊 4-pp.95-99，2016.02　発行者：静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター　編著者：楊　海英

4）ウスビ・サコ『フロンティアと国際社会の中国文化大革命 ― いまなお中国と世界を呪縛する 50 年前の歴史』（担当：第 7 章　文化大革命期における中国援助とアフリカ外交の役割）（楊海英編）集広舎 2016 年 11 月 15 日出版社

5）ウスビ・サコ「中国における西アフリカ系商人のコミュニティ形成とビジネスの実態 - 広州に生きるアフリカンコミュニティとチョコレートタウンに焦点をあてる -」（日本アフリカ学会第 54 回学術大会 公開講演会「アフリカ新商売往来～ Money-Go-Round ～」）（信州 2017 年 5 月）（パネルディスカッション）

6）Lin, G.（2015）, [The Redevelopment of China's Construction Land: Practicing Land Property Rights in Cities through Renewals], The China Quarterly, 224, 865-887.

7）Zhigang Li, Laurence J. C. Ma, and Desheng Xue1, [An African Enclave in China: The Making of a New Transnational Urban Space] Eurasian Geography and Economics, 2009, 50, No. 6, pp. 699-719

8）Michal Lyons, Alison Brown, Li Zhigang, [In the Dragon's Den: African Traders in Guangzhou 2005-2008], IDEAR Working Paper 2009/5 pp. 1-18

9）施 錦 芳，「中国の対外援助の現状―対アフリカ援助を中心に」専修大学社会科学研究所月報 544, 11-20, 2008.10.20

10）「第 7 章　中国の対外援助をめぐる中国国内での最近の議論の動向」公益財団法人日本国際問題研究所，中国の対外援助　平成 24 年 3 月

11）Jenni Marsh, [The African migrants giving up on the Chinese dream] By CNN, Updated 0633 GMT（1433 HKT）September 26, 2016

12）Gordon Mathews, [Foreign Lives in a Globalizing City: Africans in Guangzhou] in Journal of current Chinese Affairs, 44, 4, 7-15, 2015

13）Gordon Mathews [African Logistics Agents and Middlemen as Cultural Brokers in Guangzhou], in: Journal of Current Chinese Affairs, 44, 4, 117-144., 2015, GIGA German Institute of Global and Area Studies, Institute of Asian Studies and Hamburg University Press.

14）Daouda Cissé, [African Traders in Yiwu: Their Trade Network and Their Role in the Distribution of 'Made in China' Products in Africa] The Journal of Pan African Studies, vol.7, no.10, May 2015 pp. 44-64, China Institute, University of Alberta, Edmonton, Canada

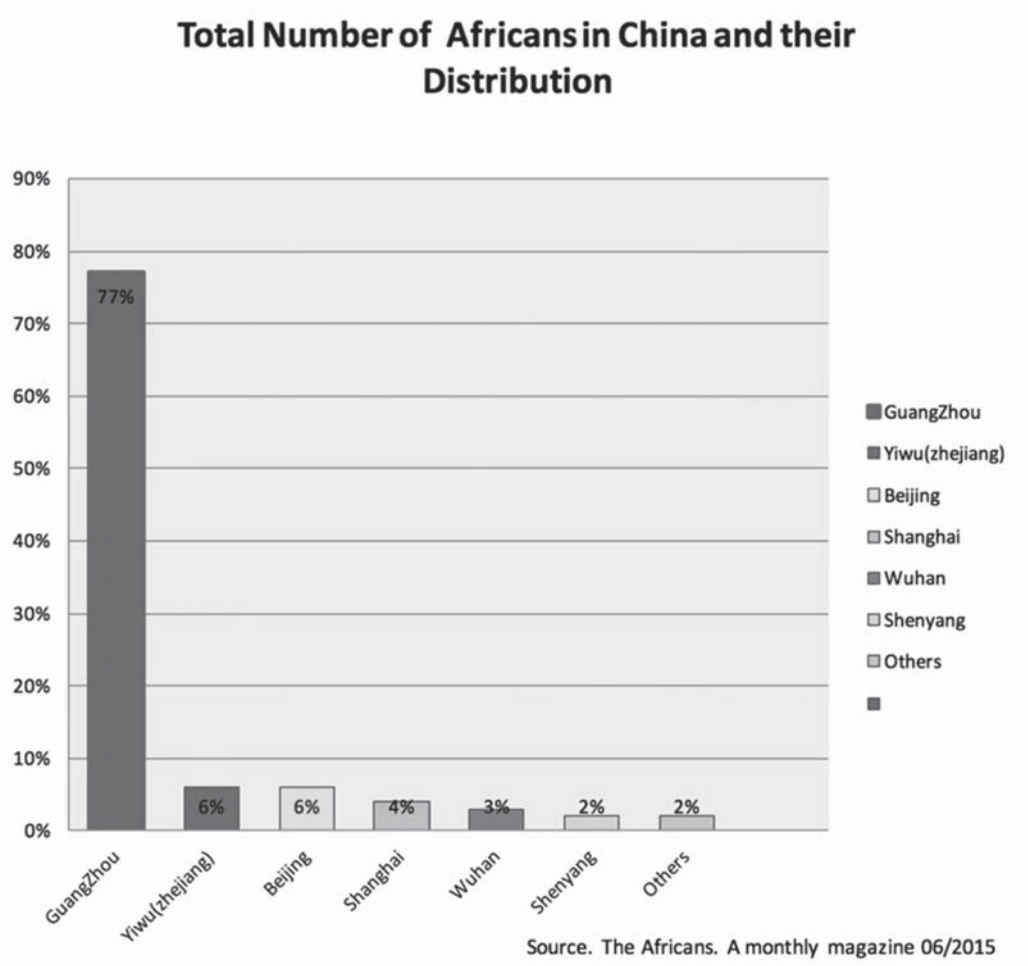
15）Li Anshan, [African Diaspora in China: Reality, Research and Reflection] Center for African Studies, School of International Studies, Peking University, Beijing, China, The Journal of Pan African Studies, vol.7, no.10, May 2015 pp10-43

16）Adams Bodomo and Grace Ma [Africans in Yiwu, China's largest commodities city] https://www.pambazuka.org/global-south/africans-yiwu-china%E2%80%99s-largest-commodities-city（最終閲覧 2018.08.24）

17）JENNI MARSH [Afro-Chinese marriages boom in Guangzhou: but will it be 'til death do us part'?] in:

China-Africa Reporting, South China Morning Post, 2JUL 2014 / UPDATED ON 30 JUN 2016
18）Gordon Mathews, [African entrepreneurs have made Guangzhou a truly global city]（2017）URL: qz.com/africa/1081203/china-in-africa-guangzhou-is-a-global-city-for-african-entrepreneurs/（最終閲覧 2018.8.24）
19）BRIGITTE BERTONCELLO ET SYLVIE BREDELOUP [De Hong-Kong à Guangzhoude nouveaux «comptoirs» africains s'organisent], Perspechives chinoises/Anne's2017/98/pp. 98-110
20）広井良典「コミュニティを問い直す―つながり・都市・日本社会の未来」筑摩書房 2011 年 8 月
21）倉沢進「コミュニティ論―地域社会と住民活動」放送大学教育振興会，1998 年 04 月
22）エミール・デュルケーム（田原音和訳）『社会分業論』（現代社会学大系 2，青木書店，1971 年）
23）ウスビ・サコ「建築のリノベーションとコミュニティの再構築の可能性―南山城村高尾地区旧高尾小学校再利用プレ調査を通して―」『京都精華大学紀要』第 42 号 . 2013 年 3 月
24）Wirth, Louis. 1938. "Urbanism as a Way of Life." 44:1-24. American Journal of Sociology（高橋 勇悦訳「生活様式としてのアーバニズム」鈴木広編『都市化の社会学理論』誠信書房，1978 年）

Little Africa starting around Guanzhou（広州周辺に始まったリトルアフリカ）
出典 https://hiiraan.org/news4/2016/Jun/106132/the_african_migrants_giving_up_on_the_chinese_dream.aspx（最終閲覧：2018.08.27）




アフリカ人の居住している都市
出典：The Africans. A monthly magazine 06/2015

広州に住んでいるマリ人ブローカー（出典：ウスビ・サコ，2012）

広州のハラールレストラン（出典：ウスビ・サコ，2016）

アフリカ人が経営するアパートメント内の理髪店（出典：ウスビ・サコ，2016）

アフリカ人が経営するアパートメント内の食堂（出典：ウスビ・サコ，2012）

広州の小売店（出典：ウスビ・サコ，2016）

アフリカ人が購入した商品のパケージ作業（出典：ウスビ・サコ，2012）

アフリカ人が購入した商品の倉庫への出荷（出典：ウスビ・サコ，2016）

アフリカ人が購入した商品の出航前の出荷（Cargo）（出典：ウスビ・サコ，2016）

アフリカ人カルチュラル・ブローカー（Togo と Guinea 出身）（出典：ウスビ・サコ，2016）

アフリカ出身女性カルチュラル・ブローカー（出典：本人，2017）

中国人女性カルチュラル・ブローカー（出典：ウスビ・サコ，2016）

南京にて会社を正式に設立したマリ出身者の社内（出典：ウスビ・サコ，2012）

南京にて会社を正式に設立したマリ人社長と社員（出典：ウスビ・サコ，2012）

新しいアフリカ人拠点議烏市（出典：ウスビ・サコ，2012）

議烏に会社を設立したマリ出身者（出典：ウスビ・サコ，2012）

アフリカのファッションショップを経営する中国人（出典：ウスビ・サコ，2016）